

第一部 過去の虚偽

第一章 パレスチナは無人の地であった

現在イスラエルまたはパレスチナと呼ばれている地政学的空間は、古代ローマ時代以降の一つの国として認められてきたところである。その地が大昔にどんな地位・状態にあったかは、聖書記述に歴史的価値を認めない人々と聖書を歴史的記録だと主張する人々の間の激しい論争テーマであった。古代ローマによる征服以前のこの国の存在意義は続く数章で記述するが、この国にパレスチナという名を与えたのが古代ローマ人であったことは、歴史研究者の間ではほぼ一致した見解のようである。この地をパレスチナと呼んだ文献の中で古代ローマの文献が一番古いからだ。ローマ帝国時代、後にはビザンティン帝国時代、パレスチナはそれらの帝国の属地で、その命運はそれら帝国の興亡に大きく左右された。

七世紀中葉以降パレスチナの歴史はアラブ・ムスリム世界（十字軍の支配下に入った中世の一時を除いて）と密接に結びついていた。北方、東方、南方に成立した様々なムスリム帝国や王

朝がパレスチナを統治したがった。何しろパレスチナは、メッカやメデイナに次いで第二のイスラム聖地であつたからだ。それ以外にも、パレスチナの肥沃性や戦略的位置が彼らを惹きつけた。それらの帝国や王朝が残した豊かな文化遺産は今でもイスラエル・パレスチナのどこどこに見られる。ただ、同地における考古学的発掘や研究はもっぱら古代ローマ時代やユダヤ教の遺跡が優先され、ムスリムのマムルーク王朝(二二五〇〜一五二七年)やセルジューク朝(二〇三八〜一三〇八年)の遺跡発掘は手が付けられていない。

現代のイスラエルとパレスチナを理解するうえでもつと重要なのは、一五一七年にパレスチナを属領にしたオスマン帝国の時代である。四〇〇年間にわたるオスマン帝国の統治の痕跡は今も感じ取れる。たとえば、イスラエルの法制度、宗教裁判記録(シツジル)、土地登記(タブ)、いくつかの建築物などがオスマン・トルコの影響を物語っている。オスマン・トルコ人がやってきたとき、パレスチナは主としてスンニ派ムスリム農民の社会で、一部アラビア語を話す都市部のエリートがいるだけだつた。ユダヤ教徒の人口は五%以下、キリスト教徒の人口は一〇〜一五%であつた。ヨナタン・メンデルを引用すると、

シオニズムがやってくる前にパレスチナに住んでいたユダヤ教徒の人口は正確にはわからない。おそらく、二〜五%であつただろう。オスマン帝国の記録によると、現在イスラエ

ル・パレスチナとなつている地域の二八七八年時点の人口は四六万二四六五人で、その内訳はムスリムが四〇万三七九五人(八七%)、キリスト教徒が四万六五九人、ユダヤ教徒が一万一一人(三%)であつた。

当時世界のユダヤ人社会はパレスチナを聖書に描かれている聖地と見ていた。ユダヤ教では巡礼がキリスト教やイスラム教におけるような位置づけをされていなかったが、それでも巡礼を信仰上の義務と考えるユダヤ教徒もいて、少数でパレスチナ参りをしていた。後述するが、宗教的理由でユダヤ教徒のパレスチナ永住を望んだのは主としてキリスト教徒であつた。

イスラエル外務省の公式ウェブサイトに記述されている十六世紀以降のパレスチナの歴史を讀めば、ヨナタンの記述がオスマン帝国統治下四〇〇年間のパレスチナだとは思えなくなるだろう。

一五一七年オスマン・トルコの征服によつて、パレスチナの地は四地域に分けられ、行政上はダマスカス県に入れられ、イスタンブールから統治された。オスマン時代が始まつた頃、約一〇〇〇世帯のユダヤ人が、主としてエルサレム、ナーブルス(シエケム)、ヘブロン、ガザ、サファド(ツファット)、ガリラヤ地方の村々に住んでいた。ユダヤ人社会は先

祖代々パレスチナの地に住んでいたユダヤ人の子孫と北アフリカやヨーロッパからの移住者から成っていた。

オスマン帝国を最盛期に導いた大帝スレイマン一世が没した一五六六年まで統治が順調であつたため、ユダヤ人移民が促進され増加した。新移民の一部はエルサレムに定住したが、大多数はサファドに住み着いた。サファドのユダヤ人人口は、十六世紀中葉までに、約一万人に増加、織物産業を興隆させた。

この記述を読むと、十六世紀のパレスチナはほぼユダヤ人が主人公で、パレスチナの通商は引用文で挙げられた町々のユダヤ人コミュニティが中心になつて担つていたような印象を受ける。では、その後どうなつたのか？ 再び外務省ウェブを見よう。

オスマン帝国の統治力が次第に衰弱し、パレスチナは放置されるようになった。十八世紀末頃には、パレスチナの土地の多くは不在地主が所有し、貧しい小作農民に貸し出していた。徴税は気紛れで苛酷、社会はどんどん衰退していった。ガリラヤの森林やカルメル山岳地帯の樹木がなくなり、砂漠と湿地が農地に押し寄せた。

この説明だと、パレスチナは一八〇〇年までに砂漠になつていて、そこに住んでいない農民が自分の所有していない干乾びた土地をなんとかして耕していたことになる。そこは一つの島のように、かなりの数のユダヤ人が住んでいて、外からオスマン帝国に支配され、帝国のいい加減な属領支配で土地の肥沃さが失われていった。年々土地が痩せていき、森林破壊が進み、農地が砂漠化していった。この捏造されたパレスチナ像は、イスラエル政府の公式ウェブサイトを通じて、広範に広まった。

この出鱈目な話をウェブに書いた役人たちは、イスラエルの歴史研究者に従つて書いたわけではない。大方の学者はそのような説明を正しいと認めて支持することに躊躇した。それどころか、かなりの数の研究者、たとえばダヴィド・グロスマン(註2)（有名作家のグロスマンでなく、人口統計学者のグロスマン）、アムノン・コーエン、イエホシユア・ベン・ハリー(註3)などは政府公式ウェブサイトの記述を批判した。彼らは、パレスチナは砂漠地どころか、数世紀にわたつて繁栄したアラブ人社会だつた——主としてムスリム社会で、全般的に農村社会だつたが、ところどころに活気に溢れた都市も散在していた、という研究成果を発表した。

これらの反証があるにもかかわらず、公式ウェブサイトの歴史物語が、イスラエルの学校教育やカリキュラムやメディアを通じて、学問的研究業績はばつとしないが教育制度に大きな影響力を持つ垂流学者たちによつて、今でも一般国民や外国人に伝播されている。外国、とりわけ

米国では、シオニズムが上陸する前の約束の地は荒涼とした無人の荒地であったという解釈が、
今だに根強くはびこっている。きちんと対処する必要があるだろう。

事実検証こそが一番の方法だ。事実検証から浮かび上がってくるのは、イスラエル政府の公式ウェブサイトの歴史物語とはまったく異なる物語である。オスマン帝国時代のパレスチナは周囲のアラブ社会と同じような社会であった。地中海東北部沿岸諸国とあまり異ならない社会であった。パレスチナ人は孤立した人々ではなく、広大なオスマン帝国の一部として他国や他民族と文化的・経済的に交流していた。彼らは時代の変化と近代化にも心を開いていて、シオニズム到来のずっと以前から、すでにネーション（民族、国民）意識を發展させ始めていた。ダヘール・アル・ウマル（（一六九〇〜一七〇五年年））のような精力的な地方豪族たちによつて、ハイファ、シエファムル、テイベリア、アツカなどが刷新され、繁栄した。地中海沿岸の町々はヨーロッパとの交易で榮え、内陸部平原の町々も近隣諸国との交易で賑わった。パレスチナは不毛の砂漠どころか、ビラード・アル・シヤム（北の地）の繁栄部分、あるいは絶頂期のレバントの一部であった。農業、小都市群、歴史的遺跡などが、シオニスト上陸前のパレスチナの五〇万の住民を支えていた。

十九世紀末においては、五〇万人はかなり大きな人口で、前述したように、そのうちユダヤ人の人口はわずかであった。しかもそのユダヤ人住民たちが当時のシオニズムが推進する運動に反対していたことは、注目に値する。パレスチナ人のほとんどは農村地帯の村落に住んでいた。村落の数は約一〇〇〇村。裕福な都市エリートは沿岸都市、内陸部平原の都市、山岳地帯の都市に屋敷を構えていた。

今では、シオニストによる植民地化前のパレスチナ住民がどのような自己認識をしていたかについては、研究の結果かなり理解が深まっている。他の中東地域、あるいは中東以外の地と同じように、パレスチナ社会も、十九世紀と二十世紀の支配的な概念——ネーション——の影響を受けていた。世界の各地と同じように、この新しい自己表現様式を發展させる力が、パレスチナでも、内部的にも外部との関係からも、働いていた。中東に民族主義的思想を持ち込んだのは、一部は米国人宣教師だった。十九世紀初頭にパレスチナ入りした彼らの使命はもちろんな住民をキリスト教に改宗させることであったが、同時に民族自決という新しい考え方を伝播した。何しろ彼らは世界で一番新しい独立国を代表していたのだ。パレスチナ人知識人は、他のアラブ地域の知識人と同じように、この民族主義・民族自決ドクトリンを吸収し、定式化していった。彼らはオスマン帝国属領内での自治権拡大、独立国家樹立を願望した。

オスマン帝国側でも、十九世紀中葉頃には、知識人や政治家実力者は、オスマン主義をトルコ人中心主義と同一視する浪漫主義的民族主義思想を發展させていた。このトルコ民族主義化プロセスには十九世紀後半の世俗化プロセスが伴い、そのためイスタンブールに集中していた

宗教的権威が次第に弱体化していった。

アラブ世界では、民族主義化の一部として世俗化が進行した。当然のことだが、キリスト教徒などのマイノリティも、共通の領土、言語、歴史、文化を基盤とする世俗主義的・民族的アイデンティティを歓迎した。^{〔訳註7〕}パレスチナではキリスト教徒も民族主義に熱中し、ムスリム実力者や著名人と熱い同盟関係を結び、第一次世界大戦末期には、パレスチナの各所で、ムスリム・クリスチャン協会が誕生していた。アラブ世界では、ユダヤ教徒も同じような異宗教活動家たちの連合に加わっていた。もし、シオニズムがパレスチナ・ユダヤ人社会に全面的忠誠を強要していなかったら、パレスチナでも同じことが起こっていたであろう。

シオニズム到来前のパレスチナ民族主義に関する丁寧で包括的な研究は、ムハンマド・ムスリヤラシード・ハリデイなどのパレスチナ歴史研究者の作品に見られる。^{〔訳註8〕}彼らの研究は、すでに一八八二年以前からパレスチナの指導層も一般大衆もある種の民族的感情と民族的運動を發展させていたことを明らかにしている。特にハリデイは、その新生民族主義を構成するものとして、愛国的感情、郷土への忠誠、アラブ主義、宗教的感情、高度な教育と知識を挙げ、それが後年シオニズムへの抵抗によっていつそう強化されていったことを説明している。

なによりもハリデイが論証したのは、一九一七年に英国がユダヤ人民族郷土建設を約束した^{〔訳註9〕}ために、シオニズムがパレスチナで頭角を現す前に、近代化、オスマン帝国崩壊、ヨーロッパ

パ列強の中東への領土的野心がパレスチナ民族主義を強化していったプロセスである。このパレスチナ人アイデンティティの出現によって、地理的・文化的統一体としてのパレスチナが成立し、後にはそれが政治的統一体となった。もちろん国家として存在したわけではないが、パレスチナという文化的実体は確実に存在し、住民たちもそれに所属しているという統一的感情を抱いていた。『フィラスティーン』^{〔訳註10〕}という新聞には、住民たちが自分たちの国を命名する有様が報道されている。パレスチナ人はアラビア語パレスチナ方言をしゃべり、独自の習慣と宗教儀式を持ち、世界地図にパレスチナと表記される国で生活していた。

十九世紀の間にオスマン帝国の首都イスタンブール発の行政区改革の影響で、パレスチナは、近隣地域と同じように、一つの地理的統一体としてのまとまりを得た。そのため、パレスチナの有力者たちは統一シリア、あるいは統一アラブ国と呼んでもいいが、その内部でより強い独立性を求めようになった。この統一シリアとか統一アラブという汎アラブ主義運動はアラビア語で「カウミッヤー」(qawmiyya)と呼ばれ、パレスチナでも他のアラブ地域でも民衆から歓迎された。

有名な、いや悪名高い一九一六年の英・仏のサイクス・ピコ条約^{〔訳註8参照〕}露は革命後条約破棄に從つて、二大植民地主義大国は中東地域をいくつかの新国民国家に分割した。分割の結果、時の経過の中で、新しいもつと地域的な民族主義が生まれていった。アラビア語で

「ワタニーヤ」(wātāniyyā)と呼ばれるものである。パレスチナも自らを一つの独立アラブ人國と見る雰囲気であつた。シオニズムがやって来なければ、パレスチナはレバノン、ヨルダン、シリアと同じように近代化と発展のプロセスを辿つていたのであろう。実際、その徴候は、前述した十九世紀後半のオスマン帝国の行政区改革の影響で、すでに一九一六年に始まつていた。行政区改革とは、一八七二年イスタンブール中央政府がエルサレムをサンジャック(行政区としての県)に昇格させ、パレスチナに地理的統一性を持つ区域を作り上げたことだ。そればかりか、帝国政府は県よりも下位地域であるナーブルス地区やアツカ地区など、今日我々がパレスチナと見ている多くの地区をエルサレム県に包含させることを、漠然と考えていたようである。もしそれが実行されていたら、パレスチナに、エジプトのように、一つの地理的統一が生じ、もつと早くから独自の民族主義が誕生していたであらう。

この行政区改革は地域を北部(ベイルートが支配)と南部(エルサレムが支配)に分割するものであつたが、それでもパレスチナは小さな地方的下位行政区が分散する周辺の地位から、全体として一つのまとまりを持つ行政区へと昇格した。一九一八年にオスマン帝国が崩壊し、パレスチナが英国統治下に置かれたとき、北部・南部の分割がなくなつて一つのまとまりとなつた。同様に、同じ年、英国はモースル、バグダッド、バスの旧オスマン帝国の三県を統合、近代イラクの基礎を作つた。パレスチナではイラクのような人為的な編成はなかつたが、地理的境界(北部のリタニ川、東部のヨルダン川、西部の地中海)を超える親族的つながりの働きて、南ベイルート、ナーブルス、エルサレムの三下位地区がまとまつて一つの社会的・文化的統一体が誕生した。この地理的空間は独自の方言と、習慣と、民間伝承を共有していたのだつた。

だから一九一八年のパレスチナはオスマン帝国時代のパレスチナよりもまとまり、住民の一体感があつた。それが、後に大きな変化を蒙ることになつたのだ。一九二三年に正式にパレスチナ委任統治を開始した英国は、国際連盟による最終的なパレスチナ地位決定を待つている間に、民族運動の活動の場、住民の帰属感の対象となる地理的スペースの輪郭を明確にしようと、国境線に関する国際交渉に尽力した。おかげで、どこからどこまでがパレスチナかはかなりはつきりしたが、はつきりしなかつたのは、それが誰のパレスチナであるのか、つまり先住民パレスチナ人のパレスチナか、新規参入ユダヤ人入植者のパレスチナか、ということであつた。この委任統治国が演じた決定的な皮肉は、国境線明確化がシオニズム運動の「エレッツ・イスラエル」(イスラエルの地)——ユダヤ人だけが土地と資源に対して権利をもつ——思想に、具体的な地理的概念を提供したことだつた。

従つて、パレスチナは無人の地ではなかつた。十九世紀に近代化と民族主義化の過程にあつた、豊かで肥沃な東地中海世界の一部であつた。それは開墾されるのを待つていた荒地ではなかつた。近代化への変化が持つ悪い点も良い点も合わせ備えた社会として二十世紀を迎えよう

としていた、一つの牧歌的社会であった。それがシオニスト運動による植民地化という大きな変化を被り、先住民たちに大災難が降りかかったのである。

註

- (1) Jonathan Mendel, *The Creation of Israeli Arabic: Political and Security Considerations in the Making of Arabic Language Studies in Israel*, London: Palgrave Macmillan, 2014, p. 188.
- (2) 外務省公式ウェブサイト mfa.gov.il から。
- (3) 一例を紹介すると、オスマン帝国下エルサレムの歴史に関する高等学校教育カリキュラムが cms.education.gov.il で見られる。
- (4) 交易に関する研究については Beshara Doumani, *Rediscovering Palestine: Merchants and Peasants in Jabal Nablus, 1700-1900*, Berkeley: University of California Press, 1995 を参照された。
- (5) Rashid Khalidi, *Palestinian Identity: The Construction of Modern National Consciousness*, New York: Columbia University Press, 2010; Muhammad Muslih, *The Origin of Palestinian Nationalism*, Institute for Palestine Studies, 1989.
- (6) この新聞についての詳細及びその民族運動への貢献については Khalidi, *Palestinian Identity* を参照された。
- (7) Salim Tamari の論文集 *The Mountain Against the Sea: Essays on Palestinian Society and Culture*, Berkeley: University of California Press, 2008 がシオニズムに阻害されなかった場合のパレスチナ近代化の可能性について見事に論じている。

- (8) Burrus Abu-nanah, "The Rise of the Sanjak of Jerusalem in the Nineteenth Century," in Ilan Pappé (ed.), *The Israeli/Palestine Question*, London and New York: Routledge, 2007, pp. 40-50 を参照された。
- (9) より詳しくは Ilan Pappé, *A History of Modern Palestine: One Land, Two Peoples*, Cambridge: Cambridge University Press, 2006, pp. 14-60 を参照された。

〔訳註1〕ケンブリッジ大学でアラブ学を学び、オックスフォード大学の研究グループである「イスラエル戦略フォーラム」の責任者を務めた。現在ネゲヴのベン・グリオン大学で教えている。英国委任統治時代のアラブ学へのドイツ・オリエンタリズムの影響の研究で有名。

〔訳註2〕一九六〇年、旧ソ連サマルカンド生まれ。一九七三年にイスラエルへ移民。一九九九年、五年シヤス党国会議員。

〔訳註3〕地理学者。ヘブライ大学名誉教授。

〔訳註4〕ベドウィン系パレスチナ・アラブ人で、名目上はオスマン帝国属領だが事実上の自治国家としてパレスチナ北部を統治。彼の統治下でアッカはヨーロッパとの綿布交易センターとなった。

〔訳註5〕主に十五世紀にヨーロッパ交易で栄えた地中海東側沿岸諸都市を表す言葉で、仏語 *lever* (上る) を語源とする「陽が上る地」。レバントは現在のアラブ・ユダヤ対立を止揚する言葉として使われることがある。 cf. Ammiel Alcalay, *After Jews and Arabs: Remaking Levantine Cultures*, University of Minnesota Press, 1993.

〔訳註6〕オスマン帝国内では宗教、民族の別にかかわらず、住民全ての平等を基礎に、政治的一体性を維持するという考え方。

〔訳註7〕「そもそも、パレスチナの住民を『ユダヤ人』と『非ユダヤ人』に二分する考え方は、ヨールロッパから持ち込まれたものなのだ。現地の人々が『アラブ人』という場合は、ムスリム、キリスト教徒だけでなく、ユダヤ教徒もふくんでいた。」(奈良本英佑著『君はパレスチナを知っているか』、はるぶ社、一九九七)

〔訳註8〕ユダヤ人の戦争協力をとりつけるために、パレスチナにユダヤ民族郷土建設を約束したパルフォア宣言のこと。前年の一九一六年には、英、仏、露で戦後の領土分割を決めたサイクス・ピコ秘密条約を結び、さらにその前年にはアラブの協力をとりつけるために、アラブ独立国建設を約束するマクマホン書簡を出すなどの英国の三枚舌外交が、パレスチナ問題ばかりか、現在のISIS問題などの元凶となった。

〔訳註9〕一九一〇〜一九六七。オスマン帝国下、英国信託統治下で最も影響力があった日刊紙で、アラビア語版と英語版があった。反シオニズム、パレスチナ民族主義を基調としていた。

第二章 ユダヤ人は土地なき民族であった

前章で論じた「パレスチナは無人の地であった」という神話は本章のテーマ「ユダヤ人は土地なき民族であった」という神話と表裏一体の関係にある。

そもそも、ユダヤ人入植者は一つの民族だったのか？ ユダヤ人が民族かどうかは何年も昔に提起された疑問だが、最近の研究で再びそれが取り上げられた。よく知られたこの重要問題は、シユロモー・ザンド著『ユダヤ民族の発明』(The Invention of the Jewish People)の中で見事にまとめられている。ザンドは、近代史のある時点でキリスト教世界が、自分たちの都合のために、ユダヤ教徒はいつの日か聖地へ帰還すべき民族であるという考え方を支持した、と書いている。彼によれば、この帰還は終末へ向かつての神の企図の一部で、それには死者の蘇りとメシア(キリスト)の再臨を伴う。

十六世紀に起こった宗教改革がもたらした神学的・宗教的大激動から、千年王国の終わり

sapientia 55
サピエンティア

Ten Myths About Israel

イスラエルに関する 十の神話

Ilan Pappé

イラン・パペ [著]

脇浜義明 [訳]



法政大学出版局